

令和 6 年度

研究調査報告

【概要版】



四日市市教育委員会教育支援課

第420集 林 直哉

若手教員の力を引き出す先輩教員の見方・考え方

—— 授業リフレクションの分析を通して ——



第421集 川合 由佳 倉田 優希 田中 寿子 山田 芽衣

情動可視化アプリを活用した不登校未然防止

—— 「心の天気」から見える予兆 ——



1 研究の目的

若手教員の力を引き出す先輩教員の見方・考え方を明らかにし、若手教員育成のための先輩教員の支援のあり方について検討を行う。

2 研究の内容と方法

(1) 若手教員成長の場「授業リフレクション」

授業リフレクションとは、授業で用いた指導方法の背景にある教員自身の見方・考え方を問い直し、検討する場である。これによって、若手教員の成長が促されたという先行研究が見られる。

しかし、若手教員の成長と先輩教員の支援の過程について詳細に分析し、先輩教員の支援のあり方について検討した研究は見られなかったため、本研究の内容とした。

(2) 研究対象と分析方法

研究対象者は、経験豊富な2名の教育アドバイザー（以下、先輩A・B）とその指導を受ける2名の新卒臨時的任用教員2名（以下、若手A・B）とした。令和6年4月から7月までの期間、月1回程度先輩Aが若手Aの授業を観察し、授業リフレクションを行った。授業リフレクションの発話記録と筆者による先輩Aへのインタビュー記録をもとに、筆者がエピソードを記述し分析を行った。

分析は、人の成長やその支援の過程を明らかにすることを得意とする、TEM（複線径路・等至性モデル）と呼ばれる研究方法を用いた。この方法では、TEM図を作成して分析する。筆者が先輩Aや若手Aと対話しながら原案を作成し、加筆修正を加えることでTEM図を完成させた。先輩Bと若手Bに関しても同様の方法で、調査・分析を行った。

(3) 結果

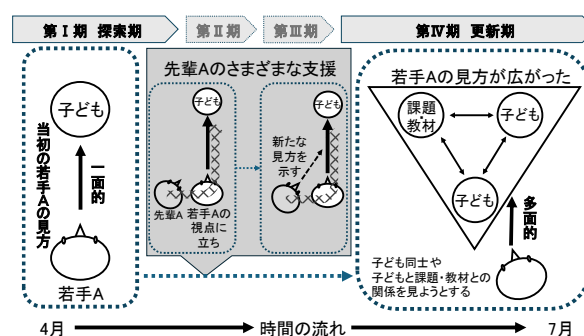
先輩Aと若手A、先輩Bと若手Bの経験及び支援の過程を図に表した結果、次のように時期区分できた。先輩教員が若手教員の視点を探索する時期（第Ⅰ期：探索期）、先輩教員が「若手教員と視点を共有する時期（第Ⅱ期：共有期）、先輩教員が若手教員の視点を転換する時期（第Ⅲ期：転換期）、先輩教員によって若手教員の視点が更新される時期（第Ⅳ期：更新期）であった。若手教員は、これらの時期を経て、先輩教員に「授業を見てもらうことの意義を実感する」ことに至った。

3 研究のまとめ

(1) 若手教員の経験と先輩教員の支援の過程

第Ⅰ・Ⅱ期で先輩Aは、若手Aへの質問や傾聴を通して、若手Aの困り感を探り、それに応じた手立てを提示した。それを実践することで若手Aが手ごたえを得て、子どもへの見方が深まった。次に第Ⅲ期では、個々の子どもへの対応に意識が向いていた若手Aに対して、学習課題・教材との関係を提示することによって、若手Aの視点が広がった。さらに第Ⅳ期では、気になる子どもを学習課題と向き合わせようとして、視点が偏っていた若手Aに対し、他の子どもの学習環境にも目を向けるよう促すことで、視点の広がりが見られた。

このように、先輩教員の支援によって、若手教員の視点が広がり、深まっていったことが明らかになった。



【図1】若手Aの見方の変容（本文P20より一部抜粋・編集）

(2) 先輩教員の支援のあり方

図1と同様に、若手Bの視点と先輩Bの支援についても図に表し、2例の共通点から先輩教員の支援のあり方として次の2点が明らかになった。

1点目は、先輩教員が若手教員の立場になって、若手教員の視点からものごとを捉え、思いや願いに共感して見ていたことである。2点目は、先輩教員が自身の見方・考え方を持ちながらも、若手教員にとっての一步先をタイミングよく示していたことである。この支援が「授業を見てもらうことの意義を実感する」ことにつながったと考えられた。そして、第Ⅳ期に見られた若手教員の見方は、先輩教員のこれまでの学習指導や教育に対する見方・考え方の表れであることが確認された。

本研究で得られた知見は、若手教員とかかわる様々な立場の先輩教員にとって、授業を通じた関わりの好例として、活用できると考えられる。

情動可視化アプリを活用した不登校未然防止 — 「心の天気」から見える予兆 —

四日市市教育委員会教育支援課 登校サポートセンター 指導員 川合由佳・倉田優希・田中寿子・山田芽衣

1 研究の目的

1人1台端末を活用した、児童生徒一人ひとりの情動可視化アプリ心の天気」のデータに表れる情動の振幅（天気の変化）を分析することで、不登校未然防止に活用できるかを検証する。

2 研究の内容と方法

(1) 研究対象

市内の中学校1校の2,3年生

(2) 研究の内容

市内の中学校1校の2,3年生が情動可視化アプリ「心の天気」を使用し、1日2回その時の自分の気持ちに一番近い天気をタブレット上で選択する。生徒が選択した天気の変化（情動の振幅）の大きさに着目し、通常登校生徒と不登校及び不登校リスク群生徒のデータを比較し分析を行う。また、心の天気利用アンケートを教員・生徒に実施する。

(3) 検証の方法

本研究では、研究対象生徒を四日市市内で利用されている「児童生徒の問題行動・不登校に関する実態報告 長期欠席および不登校リスク群」の資料を基に、「通常登校生徒」と「不登校及び不登校リスク群」に分類した。生徒が1日2回入力した「心の天気」データをもとに、週ごとに選択した天気の最頻値から逸脱した割合について両者の比較を行った。また、教員と生徒に心の天気利用アンケートを実施した。

(4) 結果

今回の研究で、不登校及び不登校リスク群の生徒と通常登校生徒を比較すると、情動の振幅が大きかったことがわかった。また、教員と生徒に実施した心の天気利用アンケートから、本アプリを利用することで心の天気を糸口に、教員から生徒に声をかける機会が増えたことや、生徒から教員に悩みを相談しやすくなったなど互いのコミュニケーションが活性化することがわかった。さらに、教員間でも互いに情報共有する機会が増えることがわかった。

3 研究のまとめ

(1) データと教員の観察眼を併用する重要性

調査結果から、生徒一人ひとりの情動可視化アプリのデータに表れる情動の振幅が通常登校生徒と不登校及び不登校リスク群の生徒では異なること

がわかった。

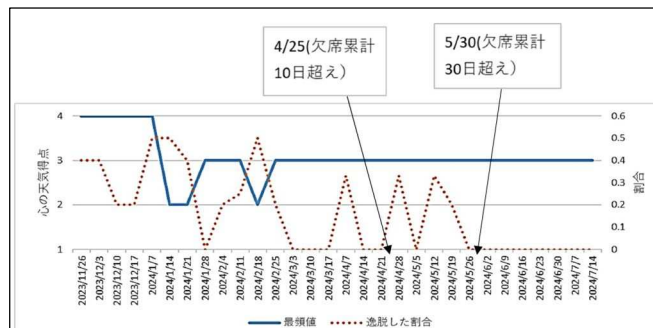


Figure 10. SR1 週ごとの心の天気得点最頻値とその最頻値から逸脱した割合（登校後）

また、教員と生徒を対象としたアンケートにおいて、心の天気の利用をきっかけに、両者ともコミュニケーションをとる回数が増えていること、先生に悩みを相談しやすくなったこと、教員間での情報共有の機会が増えたことと肯定的な回答している割合が高いことがわかった。

(2) 今後の取り組み

データの分析結果から、情動可視化アプリを利用し、生徒の情動の振幅に着目することで、不登校の未然防止に役立つ可能性があることがわかった。しかし、今回は小規模校の生徒のデータを基に分析を行ったのでサンプル数が少なく、少数事例での研究となった。また分析方法も日々の情動の振幅を週毎に分析するだけでなく、より多くの方法で検証する必要があるのではないかと考える。

また、児童生徒が今の気持ちを素直に入力していない場合も考えられることから、教員は児童生徒との関わりの中で感じられる日々の表情の変化などを見逃さず、心の状態に気づく感度を持つことが必要である。教員の観察眼と情動可視化アプリのデータの結果を合わせることで一人ひとりの児童生徒の多面的な理解が深まり、より適切な支援につながると考える。

今後の取り組みとしては情動の振幅が気になる児童生徒の情報共有を教員間で行うことで児童生徒の変容を捉えようとする教員同士の学び合いが生まれ、教員の省察力の向上が期待できる。

また、「心の天気」を活用した教育相談や、児童生徒の自己内省力を高める手段として、自身が入力した「心の天気」を振り返りに活用したりすることも効果があるのではないかと考えられる。



令和 6 年度研究調査報告【概要版】

発 行 令和 7 年 3 月

発行者 四日市市教育委員会教育支援課

〒 510-0085 三重県四日市市諏訪町 2 番 2 号

電話番号 / 059-354-8149 FAX / 059-359-0280

E-mail / kyouikushien@city.yokkaichi.mie.jp

